

皆んなで選んだ
今月の秀句

あの目から燃え盛ってる原子の火
棒読みの総理の式辞聞く遺族
太陽も土もいらぬ野菜食べ
寺内 徹乗
遠田亀公子
小山 広助

高松歴史街道
フェスティバル



(月・祝)

- ◎鶴彬墓前法要 am10:00
- ◎碑前祭 am11:00
- ◎かほく市民川柳祭 pm1:30
- ◎民謡と踊りの競演 pm2:50

8月〜9月は戦争の情報で溢れた。
忘れてはいけないことも多い。
9月14日は鶴彬の命日である。

「和」川柳社会報 六八三

定例会 二〇一九年八月二日(木)

8月に劫火で焼かれた生命。未だ核はなくなる。安倍総理の白々しい式辞を聞くのは辛い。そして未来の農業は工場生産になるのかもしれない。(周)

例会案内

9月例会 9月26日(木)
投稿締切 23日(月)
課題「出」 3句以内
自由吟 5句以内
自選句、自解筆もよろしく。

◆ 目次

川柳互選	2
課題吟「火」	2
自由吟	3
句の選考方法について	4
連作・自選句	5
ほのぼの川柳	6
おたより	7
プロレタリア文学運動の盲点⑩	7
国民を戦争に動員した仏教	8
シベリア抑留の記録⑪	8
故・秋山茂氏の手記	12
編集後記を兼ねて	16

8月の
川柳互選

◆ 課題吟 「火」

(互選) 一人3句以内吐

← 推薦者の数

火の海を逃げ惑ったのは昨日	ダン吉	6	トランプの火遊び世界中に付け火する	大峰 5
1 対岸の火事見て笑う子ぎつねめ	和子 1	6	待ち望む 野党統一 れいわの火	広助 5
1 真夜中に何故か外灯煌々と	未知子 1	6	止めさせる生きて暮らすを火焰の身	馬頭琴 4
1 原爆で 広島長崎 火の海に	宏 1	6	この炎暑電気足りてる日本国	白眞弓 3
1 業火あれ神に近づくことなかれ	立東爺 1	7	7 韓国のろうそく叫ぶNOアベと	白眞弓 5
2 灼熱の六日九日命つき	白眞弓 2	7	7 原子の火 消壺に入れ 深呼吸	広助 4
2 火付け役香港本土米やくぎ	和子 1	8	7 韓国人安倍の言動火に油	徹乗 6
2 火を使い人になりますチンパンジー	立東爺 2	8	8 三界に火種燻ぶる不気味さよ	未知子 5
3 人間を恥じよ戦火のある限り	亀公子 3	8	8 子々孫々に先の劫火を伝えたい	未知子 6
4 逃亡犯香港デモの火ふつつと	馬頭琴 3	9	9 そこかしこ火種ばら撒くポピュリズム	亀公子 5
4 火の道になろうそれでも一歩出す	ダン吉 2	9	9 森友の 火付け役人 ご栄転	宏 5
5 宗教が戦争火種まき散らす	広助 4	9	9 二千万貯めたいけれど火の車	大峰 5
5 火付け役あおる人とも大差なし	和子 3	10	10 火の用心ミサイル一本死の焦土	徹乗 5
6 ゼロ戦機 尊い生命 火の玉に	宏 3	10	10 今の世の不自由を笑う火焰土器	亀公子 5
		12	12 次々と火消しに回る安倍手先	馬頭琴 7
		13	13 簡単につぶやき火種もてあそぶ	立東爺 5
		14	14 共闘の野火が広がるジリジリと	大峰 7
		15	15 あの日から燃え盛ってる原子の火	徹乗 7

◆自由吟 (互選)

一人5句以内吐

唐辛子とわさび交わるこのない政治 亀公子

孫に書く手紙この世はこともなし 白眞弓

よくすべるジョークそれでも憎めない ダン吉

数を頼みおかしなことを言いますね ダン吉

1 子育ては即かず離れず腹八分 未知子 1

2 ヒグマ出る 命がけだよ 墓参り 宏 2

3 犠牲の元凶は言わず追悼式 馬頭琴 2

3 若い娘と平和求めてポストイング 枯芝 2

3 敗戦日 歴史反省 アベは無し 宏 3

3 戯れる時期も知らず子が親に 未知子 2

3 二言目時代の波と君は言う ダン吉 3

4 気象庁 災害列島 休暇なし 広助 3

4 警察が アベ辞めるヤジ 憲兵に 宏 2

4 風を読みいつもゆらゆらしてますね ダン吉 2

← 推薦者の数

4 爆音の合間に少年空睨む ダン吉 3

4 終戦日戦後生まれも知る暑さ 亀公子 2

4 サンダーズ希望の星と呼ばれよう 和子 2

4 原発はバベルの塔と知りました 立東爺 3

5 安倍いくさ隣国までも仕掛けるか 和子 4

5 献立はスーパーの値引きを見て決める 広助 4

5 着々と緊急事態法で独裁国 立東爺 4

5 政府言う 百年時代 自己責任 広助 4

5 キムチ食わんことにしている愛国者 徹乗 4

5 手下らの喧嘩に焦る巨大国 白眞弓 3 3

6 自由死守催涙弾に身を投じ 徹乗 3

6 トランプの紐に晋三ぶら下がり 大峰 3

6 子よ死ぬな学校の壁乗り越えよ 未知子 3

6 デキ婚も官邸保証政治力 白眞弓 3

6 消費税 上げて民には付け廻す 広助 5

7 核廃絶と言えない被爆国の首相 徹乗 4

7 学生に教師も続く香港デモ 馬頭琴 3

7 失うものあるか私に問うている ダン吉 2

- 7 口封じかつても今もアメとムチ 亀公子 5
 7 自衛隊民謡流ししのびよる 和子 6
 8 被曝土壤農民の手を寄せ付けず 亀公子 5
 8 ヤジさえもショッピキ対象令和なり 宏 4
 8 モリカケも有りが無しへとヤブの中 宏 3
 8 菅の恫喝表現の自由吹き飛ばし 馬頭琴 4
 8 言論の自由を潰す脅迫犯 徹乗 5
 9 国民に謝罪どころか売る天皇 白眞弓 4
 9 戦時下のリアル語れば非国民 徹乗 4
 10 反アベを反日と書く今新聞 立東爺 5
 10 打ち切りのわずか三日の不自由展 馬頭琴 5
 11 農民の汗に報いず輸入増 馬頭琴 6
 11 刻々と戦争前夜が忍び込む 立東爺 5
 11 基地の空軽減うそで飛び回る 和子 4
 11 ゲルニカは国連にあり少女像 白眞弓 5
 12 被爆国いつまで核を残すのか 和子 5
 13 ミサイルも選挙終われば飛翔体 枯芝 5
 13 次々と戦争準備の予算組む 立東爺 7

- 16 棒読みの総理の式辞聞く遺族 亀公子 8
 16 太陽も土もいらぬ野菜食べ 広助 6

句の選考方法について

前回の例会から句の選考方法を変え、3点句（天）、2点句（地）、1点句（人）として選考句数に上限を設けました。

動機は、それ以前はフリーにしてあったため、9割近く選考された方もおられ、深く吟味・觀賞せず、とりあえず○をつけるような感じでした。よって、句数に上限をつけることで、句の觀賞吟味を深めようと考えた次第です。しかしこの選考方法にもいろいろ長短の問題点のあることがわかりました。

良い点として、句をじっくり吟味、觀賞することが出来る。しかし選考に時間がかかり、面倒だという意見も寄せられた。また、集計に時間がかかるのは編集者泣かせである。

今後のことですが、皆さんの意見をいただき他の柳社の情報も参考によりよい選考方法を考えた

連作・自選句集

◆ 連作「初投稿」 上川 枯芝 かれしば

葬式代株で稼げと御触れあり

便衣兵 べんいへい 化け損なつて腰に銃 (※注：便衣兵)

ゴム弾の痛みも知らぬワイドショー

ふみを焼き人を埋めても天は知る

へなちよこが侮蔑したがるポピュリズム

この機械 電視機とも言うテレビとも

爆買いの武器もコーンも粗悪品

すごろくの上がりじやないよ就職は

いがみあう鼠をまとめて猫が喰い

虐待児適正対応でなぜ死んだ

手に花火ジリジリポトンに身を重ね

トラの威を借りたつもりが餌になる

プーさんに尻歯捉られるキタキツネ

上納金足りず家売る娘売る

フライ鍋気付かず泳ぐ活魚達

いと思います。

ところで、この「選考」について、編集子の意見ですが、ランクをつける必要はないのではないかと、思っています。

投句者はテーマを考え、言葉を編み、格闘して句を詠んでいます。それにランクをつけることそのものに疑問があるのです。「和」の数年以前の会報をみてもランクは付けてありません。

「あかつき川柳会」をはじめ、多くの柳誌でも投句者の作品を一覧で載せた作品集となっていて、〈天・地・人〉のランク付けは、一部の紙面で小さくおこなっているのです。川柳の作句活動や観賞、句報づくりで皆さまのご意見をお願いする次第です。(編集子)

五輪旗を下ろして上げたい旭日旗

お台場の水漬く屍に旭日旗

※注：便衣兵（べんいへい）とは、民間人に偽装して各種敵対行為をする軍人。香港の抗議行動ニュースで火炎瓶を投げた男の腰に拳銃が映っていた。

◆連作「炎熱東京五輪」 白眞弓

ダウン着て対暑訓練アスリート
救急車百台配備万全だ
竹槍で気温を下げて見せるぞな
遮熱舗装ガツプリ懐温まり
神風を頼りお百度踏む森小池
北の風吹いてくれよと天気の子

◆自選句 前田大峰

みそぎ済んだとうまい森掛け捨ててきた
トランプが脅すお前も独難民の子
偉いのは奴隷の子どもが築いた国
どぶ川へ防衛費だと押し流す
アメリカの歴史も知らず威張るだけ
アベノミクス年金の底を脱いでおく
アベノミクス下ずみから腐り出す
投票日まで付度バツタ頭下げ
改憲など一言も言わず当選し

桁違い二千万を追いかけて

改憲はどこを切つても血ほとばしる

一強は日本会議の血分けかい

赤紙に睨まれながら曾孫出来

参院選アシヨア何処へ飛ばすやら

アメリカのダニ一匹に血を吸われ

ほのぼの川柳

セミ捕りをしたくてたまらぬわが息子

ばあちゃんと戦いごっこ楽しいな

梅雨が去り蟬が出てきていざ出陣

セミ採りも終わり迎えた秋の空

カブトムシ欲しくてたまらぬわが息子

安倍内閣古閣僚に若ひとり

大根芽台風みたいにカーブする

みっちゃん道草宿題せずにすまし顔

叱る時手を取り最後は笑い顔

神田 鯛

神田 鯛

神田 鯛

神田 鯛

神田 鯛

真人 我

真人 我

おにどん

ひろ

おたより

◆「碑前祭」エールの交換をしませんか

岩佐ダン吉さんより（大阪）

不自由展 妨害だけは自由なり（ダン吉）

国会では率先して汚い野次を飛ばす安倍総理も野次を浴びるのは嫌いらしく参院選の街宣では警察官が排除。一方『表現の不自由展・その後』では理不尽な攻撃を非難するどころか「補助金交付の決定にあたっては…」(菅官房長官)と的外れの批判。

「鶴彬獄死81年」の各地の「碑前祭」、お互いエールの交換をしませんか。

この夏、愛知県での「表現の不自由展・その後」が理不尽な暴力的な攻撃と一部の首長や菅官房長官の横槍で中止に。私共は言論・表現の自由を守り広げ川柳の世界で奮闘したいと決意しています。連絡＝090－5012－6658（石佐ダン吉）

◆杉並に記念碑を 平宗星さんより（東京）

さて9月16日（月）の碑前祭・かほく市民川柳祭に伺う予定でしたが、9月から始まる秋学期の大学の授業の打ち合わせの会が16日（月）にやることになり、残念ながら、かほく市の鶴彬の碑前祭には、参加することができなくなりました。

しかし、9月11日（水）、岩手県盛岡市光照寺で開催される鶴彬川柳碑前祭には参加いたします。

今年の川柳人社主催の第43回の「鶴彬・井上剣花坊祭」は、井上信子生誕150年目の記念すべき年であり、「川柳人」の前主宰者である大石鶴子さんの没後20年目にあたります。こうした記念すべき年の「鶴彬・井上剣花坊祭」は特別なものです。

また来年は、井上剣花坊生誕150年目の記念すべき年です。剣花坊が主宰した柳樽寺川柳会の「川柳人」の発祥の地は杉並区馬橋であり、この

杉並の地に柳樽寺川柳会(剣花坊・信子・鶴彬・鶴子)の記念句碑を建立したいと思っています。

◆フォークジャンボリーに参加

馬頭琴さんより (名古屋)

9月1日、岐阜県中津川市坂下町で行われた「2019 椈の湖フォークジャンボリー」に出かけました。50年前、第1回フォークジャンボリーが上記の地で行われ、3回まで続いたことから、フォークソングの聖地と言われています。

今年、50年目を何としても開催しようと、地元の人たちや50年前裏方としてフォークジャンボリーに参加した人たちが実行委員会形式で開催にこぎつけました。

その当時からフォークソングに関心ありましたが、聴衆として参加できませんでしたので、50年目は万難を排して参加してきました。70年世代を生きてきた私たちにとっては反権力を歌うメツ

セージに関心を持ち、随分歌ったものです。当時のシンガー達(高石ともや、中川五郎、六文銭)や地元のフォークソンググループの演奏を満喫しました。

50年前の私を振り返ることができた一日でした。

.....

プロレタリア文学運動の盲点 ⑩ 国民を戦争に動員した仏教

周 立東爺

日本会議・安倍一強が強まり、国民の多くに諦めと選挙への不信、マスコミの権力迎合も目立ち、先の戦争を知る世代や歴史研究者から、「戦争前夜に似ている」と指摘されている。憲法改悪、自衛隊の軍隊への昇格、海外派兵など現実味を帯びてきている。この小論はかつての戦争へ向かった時代を振りかえり、なぜに民主主義が崩壊し戦争に突入していったかの答えを見つけることだった。

考えは様々なテーマに及んだ。これまで主に高橋隆治の問題提起を参考にプロレタリア文学運動を考えてきたが、「鶴彬句集」(岡田一杜)の解説の中からその郷土の偉人・あけがらすはや 暁烏敏を探ってみた。意外な姿が見えてきた。

暁烏敏と愚禿社

『鶴彬句集／一杜さんの解説』より

「二九一八年(大正七年)八月のはじめ富山県に起きた米騒動は同月下旬には金沢でも数千の群衆が米屋・大地主・知事官舎におしかけ、そのために七人が騒擾、強盗罪で処罰され、石川県高浜でも女一揆が発生し、能登の宇出津では婦女ばかり約六百名が米屋を襲う騒動となり、また金沢市郊外の松任町(現松任市)でも群衆の騒動が起り、穴水では『米屋と町長宅を焼打ちせよ』の過激文が貼られる等、県下は米騒動を契機に社会的矛盾を広く県民に認識させる結果を生みました。」

「一方この当時に真宗教団の改革を唱えて活動した、あけがらすはや 暁烏敏、ふじわらてつじょう 藤原鉄乗、たかみつだいせん 高光大船などの「愚禿社」ぐとくしやが起っていますが、この結社の機関誌「氾濫」はんらん(大正九・五・一五発行)によりますと、『友達の四、五人から今度「異邦人社」が結ばれた。それは決して秘密結社ではない。只現代生活の基調に飽き足らぬ人達の集いなのである——』

「愚禿社に近づいていた当時の青年の中には島田清次郎や中野重治らもいました。大正九年一月に「愚禿社」がカール・ローザ追悼集会を行い参加者が検査され、十二月には、その機関誌も発行禁止になりましたがそれでも大正十年東京での第二回メーデーに呼応して、このグループは革命歌をうたい街頭デモを行い検挙されるといふ事件を起しています。」

筆者は当初、真宗教団の改革を唱えて結成した「愚禿社」に参加していた暁烏敏を知り郷土の偉人にふさわしい人物だと理解していた。しかしこのシリー

ズを考えるために暁烏敏について調べなおしてみたところ、戦争とのかかわりが見えてきた。

「暁烏敏・戦争責任」というキーワードでネット検索すると暁烏敏が戦争に深く関わっていたことが明瞭になる。盧溝橋事件（昭和12年）の後にまとめた著作『万歳の交響楽』で次のように書いている。

.....

「太平が続くと、人間が利己的になる。この利己心を打破するには、戦争は最もよい導きである。

（中略）

利己的生活をしておるものが凡夫であり、自利利他円満の生活をするものは神仏である。戦時に働いてをる軍人は、既に利己的な生活を解脱せしめられて神仏の生活に入らしめられてをるのである。

この意味において戦争は人間を浄化せしめるものである。戦争は人間浄化の重大な神業である。私共は戦ひのために戦ひを好むものではないが、

戦ひは人間を浄化する神仏のなさしめたまふところであると信じておる。戦争は沢山の人の命を奪います。この点痛心の至りである。しかし、よく言えば、戦ひのために捨てる命は国の命として永遠に生きるものである。天皇陛下万歳と唱えて戦場に屍をさらすものは、神仏の国に生まれるのである。

（中略）

万歳は永遠の生命であり、無量寿であり、阿弥陀であります。これは人間中心の願求であります。その時その処に相応した言葉は最も力強くその言葉を表現します。

私共日本人にとりて今日の場合最も適切な救済の言葉は天皇陛下万歳の叫びであります。」

.....

容易に著者は暁烏敏と判るのだが、なぜか名前を伏せ、「大拙師と郷土を同じくする偉大な宗教家と呼ばれたある先生は……」と遠慮がちに書いて

ているのが多い。仏教関係者が書いておられるためだろうか。

暁烏敏は敗戦の後、昭和26年、真宗大谷派の宗務総長に就任している。そうとう批判があったと思われるが、彼の戦争責任についての情報はなかった。どう考えても彼の「戦争は人間を浄化する」という主張は宗教者の言葉とは信じられない。

それに対して、同じ真宗大谷派の鈴木大拙（金沢出身）は、当時、次のような言葉で出征兵士を送った。

「本当に惜しいことである。いったいどんな理由^{わけ}があつて アメリカの青年と日本の青年が殺し合わねばならんだ、こんなバカげた戦争がいつまで続くのか、わしは、この戦争で日本が勝つか、アメリカが勝つのか、そんなことは知らん。しかし、この戦争はいつの日にか、必ず終わる、終わったあとの新しい時代と世界を築くのは、まさに若き諸君の仕事だ。故に諸君はこの戦争で決

して死んではならない。捕虜になってもよいから、生きて還つてこなければならぬ。」

この鈴木大拙の言葉と暁烏敏の言葉の違いに驚く。「天皇陛下万歳と唱えて戦場に屍をさらすものは、神仏の国に生まれるのである。」という暁烏敏と「捕虜になってもよいから、生きて還つてこなければならない。」の両者には雲泥の差がある。

暁烏敏と谷口雅春

暁烏敏の「戦争は人間を浄化せしめる」という言葉からある宗教家の言葉を思い出す。前防衛大臣・稲田朋美が崇拜する生長の家創始者・谷口雅春である。谷口雅春は言う。

「私は『大自然が催し、大自然がはかろうて自分をその境遇にまで追い寄せた現在の生活』を百パーセント完全に生きることが、生長の家の生き方であるといった。この意味において『戦争』というものが吾々に課せられた場合には（現に課

せられているのであるが）それを完全に戦い抜くことが生長の家の生き方でなければならぬのである。今与えられた環境から飛出すところの出家道は、否応の選択が働くのであるから、戦争というものは魂の修養にならないというような価値判断がはたらいて、戦争忌避や、敗戦主義に捉えられるおそれがあるが、生長の家では出征する人にとっては戦場が直に魂の修養の道場となり、戦争が直に吾々の魂を練るところの公案となるのである。多くの人たちは戦争の悲惨な方面ばかり見ている、その道徳的、宗教的意義を理解しない。そしてともすれば戦争を忌避するのであるが、戦争は実に真剣な、否応なしに左右を問わずに、ただひたすらに至上命令に従うところの激しき宗教的行事なのである。」

当時の宗教界は、親鸞を宗祖とする真宗大谷派から新興宗教まで、こぞって門徒や子どもたちを戦争に送ったのである。

シベリア抑留の記録

「在ソ三年 生と死のドラマ」

故・秋山茂氏の遺稿より

11

前回までのあらすじ

マリタの森林作業が続き、下克上の争いも起きる。ボスにたてついた。「俺は正しいことをしてみんなの危急を救った」という僅かの慰めで生きている。伐採が続く中、過労と栄養失調で意識を失ってイルクック郊外の大隊本部の医務室に移った。重苦しい空気から抜け出せることが嬉しかった。しばらくして「各人装具を持って全員表に整列せよ」と命じられ、身体検査があった。金歯を売ったことで訊問された。

「パン（フレーブ）はどれだけか？」

「確か金歯一本で黒パン二本だったと思う」

「君から話かけたのか？」

「ちがう、其の頃よくソ連人が金歯を入れた日

本人を相手にパンと交換して居て、私も誘われたのだ」

「何故そんなことをしたのか？」

「捕虜が生き抜くためにはやむを得ない」

単調な取り調べ中でゲペウ中尉の白い面上に怒りの色はなく寧ろ「まづいことをやったな」という苦笑に似た表情が私には読み取れたので最初のうちは「ひよっとしたら帰国は絶望かも知れない」と思っていた私の胸を締め付けるような気持ちはだんだん和らいでいた。

「直ぐ帰れる（スコーラダモイ）」

取り調べはそれ以上追及されず私が部屋を出ようとする時、件の将校は誰に云うともなくつぶやくように「直ぐ帰れる（スコーラダモイ）」と言うのを聞いて「案外早い時期に帰れるのではないか」と期待したが、反面今までにこの「スコーラダモイ」では何回否何十回となく騙され続けてき

ただけに信用はしていなかったのであった。

長い時間を掛けてすべての検査を受けたわれわれは再び収容所に「入ることを許されず、その俣草原に座り思い／＼明るい表情で話をはずませていたが、午後になって近くの露天にある野戦ホームのような処に誘導された。

この時既にホームには長い貨物列車が入っていて機関車に近い有蓋車には沢山の日本人が乗っていて意味もなく手を振っており、見ればマリタの伐採地で測定の厳格さで苦しめられた現場監督（マッセル）や建築作業場の「主任（ナチャニック）」もニコニコし、盛んにダモイを連発して誰彼なしに愛嬌を振りまき、以前、四三四大隊に居る時、ソ連政府から帰化が認められたという名古屋出身の若いソ連婦人と見送りに来ていた。

ダモイ列車は東に東に走る

振り返って見れば、三年が十年にも匹敵するよ

うに思われた。永い抑留生活が、喰い違つた齒車のようにぎこちなく緩やかに廻り続け氷結したアングラ河が美しく古びたイルクツクの街は遙か彼方に黒ずんで見えた。「もう二度と此処に来ることはあるまい」、こうしてその日の午後三時頃だろうか、さまざまな感慨を載せたダモイ列車はイルクツクを後に夕日にさざ波が美しいバイカル湖岸を走り抜け東へ東へと走っていた。

第十章 シベリヤ余聞

1 気候と土壤

シベリヤにも四季はある。然し日本のように判然としたものではなく、春夏秋が短く冬が長い。大まかに区別し、十月から翌年四月までの約七カ月は冬で、五、六月の二カ月が春、七月下旬から八月上旬までが夏、九月が秋で、一年の半分以上が雪と氷に閉ざされるが、降雪量は満州と同様さして多いという程ではなく、一回に精々五糶程だ

が、降つた雪は溶けない。故に山中などでは四十糶内外となる冬になると太陽は驚く程遙かな南の空に移り鍋のつるのように「さーつと東から西に没してしまふ」昼間が短くて夜が長いけれども日没後、午後九時頃までは薄明るい白夜でその後も暗闇というほどではなく、午前二時頃から既に明るさを増して来るといった状態である。

イルクツク市周辺の土壤の多くは酸性の強い腐植土から砂質壤土でアングラ河両岸丘陵地帯の多くは砂土か砂質壤土で丘陵地を歩いても岩石や礫などというものは殆んど見当たらず、畑作物は馬鈴薯と甘藍。一部に人参や赤大根の野菜に限られ、直径十糶内外の馬鈴薯や、我々が一人で四個持てない程の大きな甘藍など珍しいことではないが、寒気のため病虫害がない上、土地の利用が少ない関係から、豊作である。又、シベリヤの山は鉄道沿線で見ると限り日本のような峻険峨々たる山岳といったものではなく丘陵続きの比較的なだらかな山々が幾重にも重なり

これは遠く中央アジアは黒海方面まで連なっているという。

イ 冬季

在滿十五年のうち南滿の鞍山奉天鉄岑などに約三年、残りの十二年間、綏芬河、牡丹江、佳木斯と主として東部滿州で生活した私は、寒さには或る程度の自信を持っていたがシベリヤの寒さが桁違いに厳しく、然も零下三十度でも防寒帽子の垂れを下ろさないソ連人の耐寒性は驚異であった。その昔ナポレオンがロシアに侵攻して冬將軍の到来で敗れ、第二次大戦に於いても独逸軍がモスクワ近郊まで進撃したが、冬將軍の訪れと共に敗退しているが、ソ連邦に侵攻して勝利することが如何に至難な業であるかは一九一八年（大正七年）わが国のシベリヤ出兵の歴史が如実に物語っており、三年の在ソ中、氷点下五十度に下がったことも三、四回はあったと思うが、それ以下は寒暖計の水銀柱が見えないので、正確には判らない。

五十度に下がれば日本人の屋外作業は中止されたが、五分間か十分間で鼻の孔の中が凍り鼻全体が凍傷になるのでわれわれは互いに注意し合つて絶へず鼻を摩擦しなければ見る間に白蠟色に変色して凍傷となった。

氷点下四十度以下に気温が下がると白煙とも霧とも見える極微粒の水滴群が地上二、三メートルのところを静かに流れはじめからだいたいの見当はついた。然もこのような寒気の屋外では割り箸位の太さの鉄の棒は簡単に手でぽきぽき折ることが出来た。冬季は枯木より生木がよく燃えることも驚きで白樺の樹皮は紙や枯れ松葉以上に火付きが良くて良く燃えた。伐採地で前後三回程オーロラを見たが、ときおり美しい色彩の空がゆっくり北方に移動するさまは本当に神秘そのものであった。

（次回に続く）

編集後記を兼ねて

◆八月、九月は戦争に関連した情報が溢れる。九月一日は特別な日でもある。関東大震災（1912）の混乱の中で発生した数々の事件。甘粕事件、福田村事件、亀戸事件など。警察や軍部が反体制活動家を多数非合法に惨殺した。凄惨を極めたのが朝鮮人虐殺事件。自警団と称する一五〇〇名の民衆が在日の人を襲った。推定犠牲者は数百名〜六千名と伝わっている。日本の社会に暗然と流れている単一

民族主義と差別風土。戦争に突入する大正（昭和を生きた鶴彬に学びたいと思う。◆鶴彬の命日は九月十四日だが、今年の高松の墓前祭などの行事は十六日。東京鶴彬顕彰会から六名のメンバーが参加される由。懇親会も予定されている。◆前月から投句選考の「基準」を変更したことについて、反応がいろいろありました。4頁に中間的なまとめを載せました。選考方法を変える」と会報の雰囲気もガラリと変わるかもしれませんね。（周）

8月例会のご案内（毎月第4木曜に変更！）

- ◆例会 9月26日（木） ◆投稿×切：23日（月）
- ◆課題 「出」 3句以内 ◆自由吟：5句以内
- ◆自選吟、連作、エッセイ、川柳論、ご意見などもお願いします。川柳に関する資料などもご紹介下さい。
- ◆句報を持参下さい。例会で話し合います。
- 投稿 FAX(076) 254-0762
- メールアドレスは下段に。

郵送は
下段住所へ。

「和川柳社」会報
会員募集しています！

同人：4000円/年
投句/購読：2000円/年
★会報の他に、関連資料などもお送りします。

和川柳社 〒920-0335 金沢市金石東2丁目15-30（渡辺 寛）

電話 FAX：076-254-0762 PC-mail：kananabe@popolo.org

携帯：090-9445-1302 携帯 mail：kan-wata@i.softbank.jp

振込先：北國銀行中央市場支店 #191 普通 640 「和川柳社」